土屋文明著

平福百穂畫伯裝幀

アララギ叢書第二十編

歌集 ふゆくさ

東京 古今書院發行

歌集

ふゆくさ

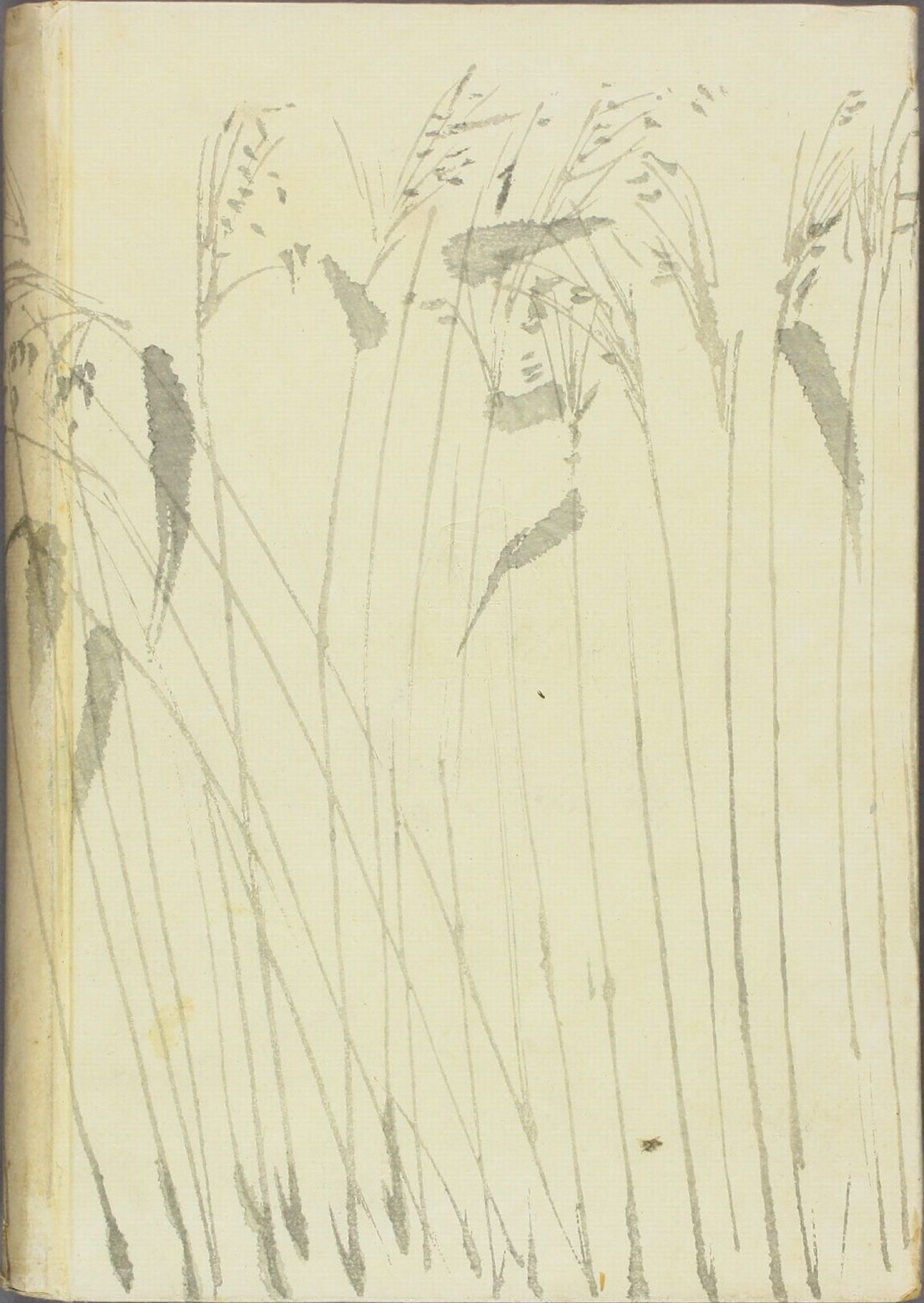
土屋文明著

古今書院

歌集 ふゆくさ

土屋文明著

古今書院



土屋文明著

アララギ叢書第二十篇

歌集

ふゆくさ

東京

古今書院發行

1

ふゆくさ目次

装禎及口繪　平福百穗氏
自明治四十二年至大正五年
睡蓮(四首)……一
赤城湖(四首)……三
冬草(三首)……六
雛草(三首)……八
灰ふる日(二首)……一〇
左千夫先生逝く(三首)……一一

山上相聞（十四首）……一三
白楊花（四首）……二一
春宵相聞（四首）……二三
庭前秋色（八首）……二六
野分（四首）……三〇
大正六年
船河原橋（六首）……三三
防波堤（二首）……三六
蠶室の一夜（八首）……三八
梟（七首）……四二

枸杞の芽（十二首）……四六
庭前即事（十首）……五三
大井の濱（二十二首）……五八
亡弟（七首）……七〇
富士見原の茶屋（九首）……七四
大正七年
海苔の芽（八首）……七九
寒潮（八首）……八三
えごの花（八首）……八八
榛の花（七首）……九二

踏青（七首）……九六
上諏訪雜詠（七首）……一〇〇
薄荷草（八首）……一〇四
碓氷嶺（八首）……一〇九
湯ある家（八首）……一一三
後山村（九首）……一一八
大正八年
田宿の家（十五首）……一二三
寒き朝（五首）……一三一
歳末上京（三首）……一三四

弟の墓（一首）……一三六
わさびの花（八首）……一三七
ぢしやの花（六首）……一四一
大正九年
枯芝山（八首）……一四五
伊那（八首）……一四九
輕井澤（八首）……一五四
新湯（八首）……一五八
夜行車（三首）……一六三
長崎（二首）……一六五

富士見高原（八首）……一六六

大正十・十一・十二年

夏來る（三首）……一七一

日向青島（一首）……一七三

赤倉（三首）……一七四

空しくかへり來りて（三首）……一七六

木槿の花（三首）……一七八

大正十三年

松本を去る（五首）……一八〇

追分原（五首）……一八三

春月（五首）……一八六

子を守る（五首）……一八九

小俣鷄足寺（十二首）……一九二

幼兒を伴ひて（四首）……一九八

那須（十九首）……二〇一

兩崖山（十二首）……二一二

村上先生逝く（三首）……二一八

卷末雜記

睡蓮

1

この三朝あさなあさなをよそほひし睡蓮の花
今朝はひらかず

2

日に耻ぢてしぼめる花の紅は消え失するがに
色沈まれり

あくがれの色とみし間も束の間の淡淡しかり
睡蓮の花

3

今朝ははや咲く力なき睡蓮やふたたび水にか
げはうつらず

赤城湖

奥山の夜更け雨夜の一つ家に旅を興じて人等とよめり

來談れといふにも行かず夜の湖を見つつ淋しも吾が旅ごころ

さわぎ飽きし人等寝にいり雨小やみ軒の雨だれややや靜かなり

かりそめの興に動きし旅ごころ更に淋しく思ひしづめり

冬草

日だまりの赤土がけの崖の下ふゆくさ青き泉
にいでぬ

この頃の日和つづきに萠えいでしみづべ冬草
ふみてあそべり

日のあたる背は汗ばめり冬草の生ひて冷きみ
ぎはべの土

雛草

春日さすか黒き土に雛草なよやかにのびて幼
き日思ふ

山藤の幼き花をうれしがり遊びし汝はいまは
たけしや

ひひな草たげたはむれし汝が髪いまくろかみ
と房にたるべし

灰ふる日

楢原の春の若芽に灰ふる日木の間にうすき影
をふみつつ

灰をかぶり林いづればうすら日に桃あかあか
と咲ける原あり

左千夫先生逝去

疊まざる洗ひ衣きるをまがごとと家人にいは
れいそぎいでたり

あるがままの蚊取線香を上げたれば落ちてた
まれる蟲のかなしさ

夜の風はしげく吹き入り先生はかけ衣の下に
動くがにみゆ

山上相聞

久方のうすき光に匂ふ葉のひそかに人を思は
しめつつ

榛の葉のうら葉しらしらじら吹く風にさすや夕日
のともしきものを

くれなゐのうすき村色の葉の上にさすとしも
なき夕日なりけり

赤城根の秋の木の間にりんだうは紫にして實
をはらみたり

りんだうは實をもちながら紫のいよいよ深く草に交れり

霜ふれば霜に枯れゆく山の上に濃き紫のりんだうの花

秋山の木の下に熟るる草の實のひそかなるもの色にいでつつ

山の上は秋となりぬれ野葡萄の實の酸きにも人を戀ひもこそすれ

山の上に天の露凝るみづうみは憂ひこもれり
吾が心かな

紅葉する谷にひそかに澄む水の吾が戀ならず
つつましきかな

夕されば牛の仔群れて鳴くなれど黒きみづう
みの水は動かず

うつつなく岸を走れるわれなるに夕ぐれの湖
動かざるかも

岳蕗の花は黄色に咲きたれど榛の太幹はもだ
し並べり

西方に峽ひらけて夕あかし吾が戀ふる人の國
の入り日か

白楊花

白楊の花ひそみ咲く木にゐる鳥の影はさしつ
つ鳴かむともせず

裸木に花はひそかに咲きてあり地の上の影の
ゆれ動くかな

白楊の花ほのかに房のゆるるとき遠くはるか
に人をこそ思へ

ほのかなる影を地の上、にゆれ動く花のうれひ
をふみぞわがする

春宵相聞

夕べ食すほうれん草は莖立てり淋しさを遠く
つげてやらまし

ふる里の春の林の白楊の花かなしとはみて幾
年を經し

みなぎらふ光のなかの白楊の花ひそけきから
にかなしく思ほゆ

春といへど今宵わが戸に風寒しわがこころづ
まさはりあるなよ

庭前秋色

○夕されば さやぐ竹にもあらなくにおのづから
なる秋の色かも

○いつとなく散れる櫻の蟲食ひ葉石の間に重り
にけり

砌べの莠實となりこぼれたりわびて庵すわれ
ならなくに

ゆくりなく延びし垣根の諸蔓に零餘子ふとり
て目につく今は

くさむらの葉がくれなりし酸漿も秋づく色に
ととのひにけり

茂りあふ草のもろ葉をしひたげて秋づく日影
照れるひととき

露草の莖にはうすき紅みえて秋に近づく庭の
草むら

羽根剪りて子等がはなてる老蟬のねには鳴かなく草にとまれり

野分

丘の上のまばら榛の木秋ざれて騒ぐ夕べをゆく人もなし

うらぶれて草吹く風に従はば吾は木の間にかくろひなむか

秋ざるる夕べなれや人の影戀しこひしき人に
追ひ及かむかも

夕ぐるる丘の野分は草吹きて榛の木をふきて
いづくともなし

船河原橋

船河原橋吾は渡れり夕暮れて忙しき人はあま
た渡るも

往き來人繁きがなかに吾がのぞく欄干の下み
づは瀨に立つ

引き潮に泥の川底あらはれて据われる船を女
いで來も

夕ぐるるちまた行く人もの言はずもの言はぬ
顏にまなこ光れり

われをみしは造兵廠の職工か目もあわただし
ゆきすぎにけり

まなこあへば眼みだれて人はすぐ淋しとだに
も言はましものを

防波堤

海の面くろく張りあげ高くみゆをりをり沖に
光る波かも

風まなき防波堤かげわが居るや小松がもとも
霜がれにたり

蠶室の一夜

わがために蠶室きよめて床のぶるたらちねの
母腰かがまれり

故家の蠶棚のあひに一夜ぬる天の遠夜に蛙は
ひびく

妹は寢つきてあれば母はそを覺まさじとして
小聲に物言ふ

○

夕ぐれてかへり來しかば木を見ずて李やなる
と母に問ふかも

○

母と吾が話のあひを耳遠き祖母は高らかにお
の言をのる

○

羽ばたきて巣の鶏なけばたらちねの寝よとは
言ひてなほも話すも

弟は働きつかれねたればか布團かきのけねご
とをいへり

弟のねざまなほしてたらちねは細きランプを
消さむとすなり

梟

夜ふけて事なきからに爪きれる吾を驚かし梟
の啼く

梅雨ぐもり光つつめる空のもと榎はくろく家
にせまれり

啼く鳥は八幡の森にこもるなり宮居の屋根の
くろく高しも

くもり空に灯うつれる町のかたふくろふまね
てゆく童あり

わらはべの聲にうながされ啼くふくろ重りあ
へる家根にひびけり

町のなかは溝の香立ちて鬱しきを如何にせむ
とか吾がいでて來し

梟は啼かなくなれりまね聲の拙くぞひびく町
中にして

枸杞の芽

森かげの庭の上なる崖にして枸杞に交りて山
吹さけり

春ふかきこの崖下に移り來て枸杞の芽立をつ
みにけるかも

後れ起きて枸杞味噌汁をひとり食ふ硬きところあり春もたけしか

今朝みれば石垣あひの虎耳草紅蔓のびて石の上をはへり

八幡の崖の上なるけんぽ梨陰ひろくして庭をおほへり

崖底の狭き庭に立てば空の若葉朝の光りにひかり翻れり

○いささかの土をうれしみ何かまかむと赤き袋の種子を買來つ

鳳仙花種子の赭きにかけてやる此の庭土は小石まじれり

○雁來紅ここだく蒔きて心うれしゆき住まらぬ吾と思へや

ふるさとの吾が家の庭にははき草かたまり生へて春ふかからむ

ふるさとの吾妹八千代よ汝が庭のははき芽ば
へを汝兄は忘れず

八幡の宮の高木に吹きあつるあらしとよめて
眠さめたり

庭前即事

この四月朝に日にみし山椒の木崖高ければ實
もとらざりき

山椒の木に山椒の實は少くて末葉すがれとなりにけるかも

山椒の實は房ながらやや黄ばみ秋づくものをあはなくも久し

森下の繁樹がもとのさ庭には靜かにもふる夏落葉かめ

榎より時じくの落葉ふりたまり亞鉛の屋根は覆はれにけり

夏ながら落葉の散りて亂るれば待つにかひなき人のたよりか

榎の高木さららに風の吹きあてて秋に先だつ落葉こそ散れ

崖の上にわづかしげれる叢に溝蓼は穏にいでにけるかも

赤土にまきしおしろいのびあしくいまだ咲かねば吾が去らむとす

虎耳草枯れし崖間に鴨頭草の咲けるをもみて
吾が去らむとす

大井の濱

潮路作す朝開の海よみなぎれるそのくぐもり
に吾が堪へざらむ

聲ひそめなぎたる海の面ふくれ光れる潮のわ
れにせまり來

ありつつも移る潮路のわかれつつひびのほ遠
く流れ合ひたり

ひびつめる大井の濱の板びさしつぎて長きを
今朝みつるかも

くろぐろと命を甲ふ船蟲の群れ求食るかも朝
のひかりに

朝磯のあくたにあさるふな蟲の足音におぢて
ざわめき亂る

桟橋のくち木のうろにかくれつつなほあらは
なるいのちなれかも

雨きらふ濱廂長くつづきたれば吾が住むとこ
ろはるかに思ほゆ

秋の雨降るがなかなる八潮路の八百路のはて
は霧らひ合ふかも

町うらに遠輪をゑがくみづきはのやうやくあ
はく霧に入るみゆ

人に遠く雨の一日をこもり居れば乏しくもあ
るかいきのいのちの

わが知れる友のいそしみもおもほゆに潮路み
だれて波立つらむか

青すめる潮に争ふ濁り波おどろの心せめてゐ
るかも

遠き人心にもてばかつがつにかへる帆目守り
ゆふとなりけり

秋されば青める潮にかづく鵜の間遠に人を戀
ふといはめや

夜おそく電車を下る濱川のつぼひび垣は雨に
ぬれ居り

ひび垣の小路ゆきつつ磯の香になれてろとき
を吾とか云はむ

夜學よりつかれかへりて尿する垣根のもとの
夜夜のこほろぎ

ひび垣の根にたまる水光りたり足場あやうき
町うらのみち

つかれたるわが袂にて重き柿机におけり袋な
がらを

袴とらず坐りてしばしある吾に波の音なく忘
れし如し

夜をこめてはしける船か沖の方にこもりてひ
びく汽笛はきこゆ

亡弟と相伴ひて春山に一日
暮らせし昨日と思ふに

松の木の幹はくろけれ本滋き小楢が原に夕あ
かりあり

年を經て來しそひ原の榛の木の若芽みなふき
郭公も近し

たづの木の枝をたわわに咲くあけび紫こごり
玉に貫きたり

たづの木の枝に上らせ折らしめしあけびもい
まは心がなしき

たらの芽の重き負はせて芝山をいそがせし姿
目につきて去らず

弟をはふりの道の天はれてぬるで紅葉はそよ
ぎ光るも

父親がつひのなぐさとはかしむる袴もあはれ
吾が古はかま

富士見原の茶屋

霧あめのしぶく軒うちに妻に別る森林の吏は
木箱負ひ居り

霧こごる朝を別れてゆく夫の林の道はめぐり
くだるも

人の夫は遠くみえなくなりにけり雫ふる垣に
あかきみねざう

みどり葉の中に露たるみねざうのつぶら紅き
實こころころと落つ

谷はめぐりふところなせる山もとに寄りて乏
しき家村のみゆ

きりたるる山岸道をゆく人の槻の小村にかく
ろひなむか

きりの上は日のさすらしく明らみて榛の林に
鳥つどひなく

富士見野を朝ゆきしかば露原にいまだ含める
りんだうの花

釜無の山ちかくみゆいただきの松はまばらに
草の色しるし

海苔の芽

答へせぬ吾にもの言ひその末を獨語ちつつ祖
母は寢る

けふ一日答へせざりし悔い心海をみせむと夕まけていづ

語りつつ濱にいづればおほははの凪に据われる船をよろこぶ

船頭がもちて下り來る籠の魚うごくを興じ立ちて歩まず

われこの日錢をもち居るうれしさに買ひて參らすうごく鰈を

いきどほろしき人を持ちつつ海苔拾ふわが行
ひは知らせ給はず

夕日あたる突堤壁の海苔の芽は映えて青しも
潮は落ちゐる

夕さむき潮に浸りて吾が拾ふ牡蠣にも海苔の
つきてゐるかも

寒潮

造り岸さむざむ浸しよる潮のかわける道にあ
ふれむとする

滿ちきりし潮はふくれて高高とわがゆく道に
襲ひ來らしも

ほこりまじる潮香はうとし廣き海に面は向け
ず吾は歩めり

人うとむ思ひに堪へていでて來し海岸道路に
寒さはつよし

防風林かげの家よりいでし子に夕あかりして
人偲ばしむ

造り岸立ちゆく少女石落し青きうしほは泡立
ちにけり

くろき潮みなぎるなかの澪標うごくとせぬを
みて歩みけり

ひとすぢに南に向ふ白道をわれは歩めりゆふ
べといふに

えごの花

道の上にえごの白花散りしきて豆蒔鳥は昨日
よりなく

藪かげはすでに小暗し郭公におちてわがふむ
えごの白花

暮れなづむ夕べなれやも山裾の段段の村にか
しぎのけむり

かへり遅きわれを求めよぶ母の聲は夕しづむ
村にひびきわたれり

裸なる代馬を追ふ常公は卯木の鞭をわれにく
れたり

衣の裾に螢はつつみ萱草の葉笛をならし來る
わが弟

弟は友に別れをよび居しがいつか眞似居る郭
公のこゑ

弟とならびかへりし父の家もその弟もいまは
あらずも

榛の花

霜とけてぬれうるほへる黑き土土はひろがる
ゆふぐれの國

榛並木さゐさゐ沈む原遠く地をつたはりて來
る音あり

冴えしづみ身ぬちにひびく寒きゆふ榛のつぼ
みははつか垂れたり

丘北の日むきにそむく榛並木枝下道はいまだ
凍れり

どろどろとつながり長き貨車すぎて響はこも
る原の大地に

土車引きてこぼせる埴土を踏みていそげり默
し並びて

野の上の徒歩ゆき遠き町なればひそか宿りは
人知らざらむ

踏青

忙しき心とぼけて暇ある午後の日和をいでて
あゆめり

土佐山の木の間に立ちて目かげする今日の心
をのどかとは云はず

楓植ゑし日陰の土を下り來て歩みもとほる堀ばたの道

堀ばたにさす日溫く水ぎはに萠えし青草ややのびてあり

崖下の砂利の崩れの淺間には目高が浮きて群れ遊び居り

櫻の樹やや青みもつ枝さきにまつりて舞ふ羽根蟲は何

春の日に青き踏みつつ大井町去る日も近くな
りにけるかも

上諏訪雜詠

いただきはいまだ萠えざる峠山幾曲りして越
ゆる道あり

春おそき福澤山を越ゆる道人も通はずうねれ
るがみゆ

傾斜急き山墾畑の疎榛もいつか芽ぶきのしげくなりたり

から梅雨の空は曇れり水減れる湖の面はくもりをうつす

水落ちて野菜の屑のくさり居る湖のみぎはに歩み來にけり

柳かげうつうつうつしげくなりにけり立ちて久しき棧橋の上

くされ沼の潟にあさり居鳴く鴨の聲を遠くに
歩むわれかも

薄荷草

ふるさとに似し夕道の火山岩こころ安けく吾
が歩むなり

ゆるやかに圓き山裾めぐりゆきて一すぢ白く
かわきたる道

溝を埋むくさむらの根のたまり水みづはほの
かに光りけるかも

ゆくりなく摘みたる草の薄荷草思ひに堪へぬ
香をかぎにけり

夏されば摘みて野風呂にいれし草なき弟を思
はしめつつ

谷わたる何こだまかも心ぐしひたすら匂ふ薄
荷草の莖

並ぶ山みな圓やかに低くければ夕べのかげは
谷に深しも

谷あひに夕のとよみは遠くしてまたなき出づ
る郭公の聲

碓氷嶺

上り來て峠の茶屋に茶はのみつわがふる里の
國みさくなり

雲わけば間近き峯もかくろひて畑の葱に時じくの花

谷底に盛れ上る青葉日にいきれ峠舊道をわがくだるなり

齒をそむるおほははもてば山深くわがもいでゐるおはぐろの玉

いきれ風に榛はふたふたそよげれど葉がくれのつぼみいまだ青しも

追ひつきし炭つけ馬は馬くさし青草いきれか
げろふに立つ

苦しければ馬は人みていななけりうれしがる
ぞと馬方はいふ

暑き日は傾きにけり山の影坂本町にとどかむ
とする

湯ある家

湯ある家求めうつれり湯室ばたの楓まがりて
衰へはやし

湯室漏れまきめぐる湯氣に立ちそへる楓葉は
朽ち散りそめにけり

山國の秋早みかも此の朝げ立つ湯煙のあたた
かにみゆ

煙たつ湯をまぜながら言ふ妻の聲はこもらふ
深き湯室に

掘り下げし湯室に居れば前の川を下る船あり
石にふれつつ

雨の夜は物音もなし庭さきに二つともれるシ
グナル赤し

地盤よわき二階家に住みゆれ通る汽車にもな
れてねむる夜かも

寒き國に移りて秋の早ければ溫泉の幸をたの
む妻かも

後山村

桜の木のもみぢ並べる谷せまくきはまるところいただきに出づ

あけびの葉霜に紫となりにけり山菊の花は枯れ早くして

うら枯れし松の下草刈る男あさの山にて鎌の音せり

草かれてみどり目につく植松のまだひくけれ
ば人あらはなり

歩むわれ草山かげに入るなればおのづから思
ふおのが姿を

あたたかに秋のひる日を庭にいれて稗穂かわ
かすにほひ立つかも

楢の木に交る冬青の實は赤し谷こえて鳴く朝
の鳥かも

細やかに落葉松の葉は降り來り朝日さす林音
もせぬかも

伊那谷の村近くみゆ草山をうねりめぐりて道
も通へり

田宿の家

國とほくここに來りて妻とわれ住む家求む川
にのぞみて

温泉わけば借りてわが住む家の前をのろく流
れて行く衣渡川

煙ぬりの板の木戸朽ちややかしぎ直ちに向ふ
前の流に

收獲すみて隣の人がつなぐ船阿伽は溜りて岸
につきたり

朝な朝なつなげる船に米洗ふ向ふの人等いま
だ馴れずも

湯の口に近く植ゑたる著莪の葉の朝の凍りに
寒さを計る

旅にして家借り住まふ小和田村隣もうとく冬
にいりけり

夜おそく湯槽を拂ふ放ち湯の落ちゆくかもよ
地下に音して

降りし雪凍てて凝れば空きらひ低くくもりて
寒き日つづく

寒き國の町の習はし夕はやく大戸下ろして靜まりにけり

並ぶ町家大戸おろせば上諏訪のゆふべの道は凍りて寒し

土湯を汲む人等さむざむ並び居て高く立ちのぼる溫泉のけむり

土湯そばの船處あまねく湯氣は立ち田宿の家にわがかへるなり

わが家の湯尻は川に湯氣立てて寒く流れてゐ
たりけるかも

かきあつめ楓がもとにつめる雪ややとくるら
し湯の地溫みに

寒き朝

朝寒き木戸は開けたりとろとろと凝らむとし
てゆく川のみづ

弟の病に妻を行かしめて寒き留守家にひとり
すみをり

朝食のパンを買ひ居る店の前大氣微塵に凍り
て降り來

目の前に大氣は霜と凍るなり光りは流る朝の
とほりを

土湯の石の溫みに遊ぶ幼兒等頰こごえ居りう
す日ぐもりに

歳末上京舊居のあたりを過ぐ

ひる日浴び眞向ひに下る安藤坂親しきうとき
あたりの家家

牛込の揚場に來りわれは立つ石おろし場の桐
冬枯れにけり

石つめる貨車ならび居てざらざらと眞砂を落
す堀の荷足に

弟の墓

原なかの弟の墓は吹き曝れて地肌あらはに霜
のとけゐる

わさびの花

野の上に露るる砂みな白しこと國さとを行く
思ひかも

白砂に清き水引き植ゑならぶわさび茂りて春
ふけにけり

しらじらとわさびの花の咲くなれば寂しとぞ
思ふおのが往き來の

溝なせるわさび畑の水にうつる雲をみつつも
早き汽車かも

堰の水かかりしき原にあふれたり鳴きてせはし
き春鳥のこゑ

人の前に言はあげ來つ己から空しきこころ悔
しかりけり

げんげ田はいま暮れむとすうつろなる心をも
ちてわがかへるなる

かくしつつ歸らむと思ふ諏訪の家に溫泉ある
こそうれしかりけれ

ちしやの花

山北の谷に向ひていばりする頭のうへのぢし
やの木の花

おしなべて雑木はいまだ芽ぶかねば日陰は寒
しぢしやの木の花

○

谷の氣は霧らひて深し空の上に鳶の描く輪の
大きくありけり

天傳ふ春日かぎれる湖もなれておよそに見す
ぐさむとす

たたなはる山のかげろふに鳶は舞ひ入りめぐ
る谷物の音なし

木の下の斜面下りて踏みくづす土は冷しぢし
やの木の花

枯芝山

ゆるやかの起伏つぎつぎにかさなりて涯はる
かなり枯芝の山

かさなれる圓き枯山の原とほく空の青きにつらなりてみゆ

おしなべて同じ枯色の山原にかわきて白き道見ゆるなり

枯草を高く積み來る車あり日の溜り居る坂のくだりを

草枯れて赤土の肌あらはれつ當藥は少し時おくれたり

温泉をかしぎにつかふ町に住み下痢も癖とて
すぎて居にけり

山の上にいよいよ高き天の下わがつみて居る
當藥の花

少女子は樂しきものか咲きのこる小松がもと
のりんだうを摘む

伊那

ゆれ強き電車を憂しと思ひつつ伊那のゆき來
も年を越えたり

澤下る水も親しく思へるに今日みれば冬の草
生ひにけり

伊那の谷は冬あたたかき南向の崖下水に生ふ
るふゆくさ

寒國に來り住みつつ春を待つ心ともしきふゆ
くさの青

杉の木の影によりつつ乏しくも青きを保つわさびの畑

斜面なすわさび畑は日を受けつつかじかみて小さき葉を並べたり

崖にあるわさび畑の水尻はことに目に立つ冬草のいろ

崖下の田に降りしける雪の上を雪解の水の圓く浸せり

輕井澤

登りつめて汽車はとどまる輕井澤霧の限れる
雪原の中に

天ぎらひ氷霧は低く地に這へり燒に染みて黑
き家かも

窓ひらく家もなければ雪原の霧はこほりて夕
ぐれむとす

煤煙(ばいえん)を吹(ふ)きつけられし樹(き)の幹(みき)の黒(くろ)きがよりて
庭陰(にはかげ)を作(な)す

ながながと貨物車(くわもつぐるま)の横(よこた)はり求食(あさ)る雀(すずめ)のこゑさ
むげなり

一日(いちにち)の汽車(きしゃ)につかれしひもじさを蕎麦(そば)食(く)ひに
ゆくホームは凍(こほ)れり

屋根(やね)のなきホームは霧(きり)の明(あか)らみてキャベツの
俵(たはら)つまれけるかも

氷採る池の日覆の菰むしろ破れに見えて霧う
ごきゆく

新湯

馬の湯に居る馬七つ日照雨に背のかけむしろ
みなぬれてあり

首筋を流るる雨におどろきてからだ動かす馬
いとけなし

馬の湯につづく湯の池およぎつつ馬に近づけ
ば馬くさきかも

馬の腹にひたひたとつく湯の湛へ底の石みな
青光りせり

岩の上の青葉をあふる霧早し湯をいでし馬は
振ひいななく

馬の湯に今朝ゐる馬は一つなり湯の中に樂樂
尾をふり遊ぶ

霧ふれば暗き部屋ぬち三人居て言葉まれなり
うときにはあらず

一日居て話はたえぬ窓にむき逸也は本をよみ
はじめたり

夜行車

手荷物の室にとなれる三等車夜ふけて犬のな
く聲きこゆ

夜行車の手荷物室になく仔犬二つなるらし二いろになく

仰のきてなほ安からぬ居ずまひの硝子戸に足をとどかせにけり

長崎

ゆるやかなる坂の敷石踏みすれていゆき親しきに雨もふるかも

霜枯れし國をいで來て道草のいまだ青きをふ
みよろこべり

富士見高原

冬木原松を交へて岡ならぶうす日影さしくも
りは高し

空高きくもりの下に横はる釜無山はちかくお
ほきし

枯草の山近ければ山腹の松のならびもつまび
らかなり

いただきは立つ木も稀に笹原と枯草原と色を
わかてり

くもり明るき空近く立つ山の嶺のくま笹原は
うす青くみゆ

おほかたは枯れし笹原白さびてつらなる峯に
匂ふ青かも

おほらかに傾き下る八つが根の麓の原も枯れ
にけるかも

かたむける麓の原の村二つ家立ちひくく土に
つきたり

夏來る

夕づく山日かげ日むきのひだしげくあざやか
にして夏さりにけり

二十日大根あまりに繁く蒔きしかば根は太らずに薹立ちにけり

ぬきすてし二十日大根の薹のびて吾が五坪の畑梅雨に入る

日向青島

梅雨すぎし浦の濱木綿花朽ちて莖のみ太く立てるあはれさ

赤倉

傾ける青高原の目路かぎる榛のならびにきり
下るなり

梅雨霧につき入りて高き山の上に光くぐもる
野尻湖のみゆ

霧ひくく襲ひてくらき原の上わらびはほけて
そよぐなりけり

大正十二年九月二日上京遂に空しくかへり來りて

殘しおきし唐もろこしは過ぎぬれど八千代は
遂にかへり來ざるか

やからたち或は離れ失せにけむ八千代は母と
あれかしと願ふ

かへらむ日もがむと置きし唐なすはうれて白
粉をふき出しにけり

木槿の花

日の光けさは濃きかもかげを作してむくげの
垣に花を摘む人

朝な朝な垣のむくげをいでて摘む吾が隣人親
しく思ほゆ

朝毎にむくげ摘み食す習はしの此の村人にも
の言はずけり

松本を去る

あめやみて黒くぬれ居る畑土に萠えにし韮も
剪らしめにけり

おほほしく曇れる空のたれくれば小屋に住む
山羊の草こひてなく

短冊をはたり忘れぬ人ゆゑに忙しきひと日籠
り墨する

いきどほろしき思をせめて墨すりつ閑心に歌
書きくらす

○

をさな兒はたぬしかるかもいそがしき造り荷
の間をめぐり遊べり

追分原

あたたかに春の光はかぎろへり枯木ながらの
落葉松の山

枯草のかげろふ中のおきな草過ぐるに惜しき
春の野のいろ

此の原に下りて遊ばむと思へども家なきに子
等は昨日ゆきにし

思ふこと貫きてたる心かはうからからは遠くかへ
らしめたり

おきな草おのがむきむきに咲きたれる此の國
人もいまは見ざらむ

春月

ひさびさにかへり來れる村の上に低く大きく
月いでにけり

もやの中に光くぐもる春の月地に近くして親
しく思はる

もやの中に低くかかれる滿月の赤くゆらめき
めぐるが如し

ひむがしに山影をみぬ國原にいでてかかれる
月の大きさ

おほ母の家をわが家と住みつきてやすき子等
かも月をみてゐる

子を守る

旱つづく朝の曇よ病める兒を伴ひていづ鷄卵
もとめに

おとろへて歩まぬ吾兒を抱きあげ今ひらくらむ蓮の花見す

幼兒は懶げに疊にねころべり狹き家ぬちに暑さこもれば

ひるすぎの暑さは迫るこの三月三度うつりてなほせまき家

桜の花ほろほろと散る山陰に臭木蟲さがす弱き兒がため

小俣鶏足寺に詣づ

兒の病やうやくよしと涼しげの午後をえらび
ていでて來にけり

かわききりて白き砂道幼兒が少しあゆむを妻
とよろこぶ

手をひろげはげましして待てどおとろへし吾兒
は尻据ゑて歩み來らず

旱つづく田のかけ水の水たまり鰌追ふ吾を兒
はうれしがる

藪中の何堂ならむ堂の縁に積む麥からの蒸れ
て香を立つ

あけ放つ寺に人なし庭の上の苔の青きが匂ひ
立つかも

旱つづく夏ながら土はしめりもつ木の下庭の
苔の青さよ

いにしへの靈池の水の白くにごり蓮葉に泥は
涸びつきたり

庫裏のかたに水汲む井戸の音きこゆ百日紅の
落つるひるすぎ

門前にひろき畑の傾斜面こやしになひて寺男
くだる

生垣のかげの根方にくくといふは鶏をはなち
飼ひ居るならむ

底の砂うごくがみえて湧く水を手にすくひ上
げ幼兒にのます

幼兒をそが祖母の家に伴ひゆく

大き家にめざめて吾兒はよろこべり山羊をよ
び花をよび鷄をよぶ

桐の葉の廣きをしきて兒はすわり母をも共に
すわらせにけり

桐の葉の落ちしをしきて朝の庭に母子坐りて
遊ぶなりけり

門さきの萱の葉ずゑの朝つゆを子にせがまれ
て採り居る母親

那須雲岩寺

しだれ櫻老木しきりに落葉せり雨ばれあとの
青苔の上に

うすくらき金堂のうち音のして佛具繕ふ人居
たりけり

しめりもちて冷き堂の氣にこもり漆の香しる
くきこゆる

○青苔の庭の日ざしに赤棟蛇いでて舌はく晝す
ぎにけり

佛國禪師の墓をめぐりて幾墓
かの石塔並べり

毳の如くみ墓を包む苔の中にふもとすみれは
葉のみなりけり

この寺を守りて幾代を更へにけむ聖等の墓傾
けるあり

人の世のここに寂しさを住み果てし墓は小さ
く苔しげりたり

草の根に昨日の雨のしたたりて墓を圍める岩
寒げなり

名月の日に逢ひて露久保といふ
字もをかし鰻坂を越え暮れて庵
野に至り宿る

ならぶ山みな萱原の穂にいでて條立つ風にな
びき光れり

女生徒はおのおの尾花を折りもちて露久保村
にかへりゆくなり

幼兒は尾花もちゆく母のあとに萱の甘莖かみ
つつ從ふ

家いつぱい吊しならべし葉煙草の青くさき家
に入りて道きく

夕近き庭の乾草かをり立ち煙草延すをんな言
葉すくなし

八溝山は天の草山いただきに近く迫りて著き
みちすぢ

谷かげに黒む茂りのところどころ白く淋しき
桜の花みゆ

夕しづむ那須國原をかこむ山煙ほのかなるは
那須嶽ならむ

電燈なきうす暗き室に尾花立て柿栗も供ふ家
ごとにして

枠に立てし尾花をかこみうからどち椀を仰ぎ
て物食ふ兒もあり

近くきこゆ水車の音に外の月の清けきを思ひ
遂に眠れり

十一月二十日兒夏實を伴ひ兩崖山に登る

落葉して日ざし徹れる雜木山すがすがしくも
青き蘭かも

根を包む落葉をかけば春蘭の蕾つのぐみ土を
いでたり

をさな兒がもぐ山すげの實は小く落葉の下に
まろび落つるよ

すげの實の碧きをはなたずもてあそぶ幼兒は
すわるぬれし道の上

のぼり來て暖かき山の日溜りに負ひし子おき
て汗をふくかも

松の木にはがかけて人の小鳥まつ山のいただ
き晝たくるなり

あたたかにさせども弱き冬の日か落葉のつゆ
のいまだかわかぬ

ひるすぎてなほ下つゆの乾かざる落葉の中の
りんだうの花

落ち散れる樫の實拾ふと立ち居する夏實のい
まはすこやかげなる

鼻をよせ口をゆがむる汝がくせの幼きにして
は淋しきものを

離れ住みて時たま來るにあまゆる兒抱きてや
れば居ねむりにけり

子は子とて生くべかるらししかすがに遊べる
みればあはれなりけり

十一月三十日村上先生逝く卽參
りて死顔を拜す

まばらなる髯すこし延びて在りしより淋しき
口を結びたまへり

思はねど過ぎてはうとき淋しさを師も言葉に
は出ださざりけむ

氣短きわれをたしなめしかられし尊き人は死なせ給ひぬ

以上三百八十首

巻末雜記

○

歌を纏めてみてはと、先進友人から云はれたことは、以前にも一二度あつたやうに思ふが、當時はその氣にもなれなかつた。舊作の拙いのを引き出してみるのもいやであつたし、もつと努めて佳い歌を作つてからといふやうな自負心も多少あつた。

しかしさうかうして居るうちに、前から微弱であつた自分の作歌力は段段消耗してしまつた。何かにつき當つて口ごもつたやうに、歌が出來なくなつた。大正九年から十年頃のことである。九年の十一月には關

西から九州の旅行をした。まだ長崎に居られた齋藤茂吉氏を訪ねてそこで一週間許り留まつた。吉利支丹寺をみたり、支那寺の棺房に這入つたりした。或る日には、平福畫伯のシーボルト屋敷を寫生される後について行つたりした。旅行中の出來事は何もかも甚だ感興をひいたのであつたが、歌は出來なかつた。長いこと心に持つて、持ちあぐんで居たが歌にはならなかつた。十年にも亦九州へ行つた。梅雨後の一日を日向青島で忙しい日程のうちからことさらにゆつくりしてみた。しかし歌は出來なかつた。殊にこの時は、裁くべからざる人の行爲を裁くべき立場に置かれて重苦しい心で、一人、軌道のみしかれて未だ汽車の通はぬ日向の東沿岸を美々津から細島まで馬車に乗つたりした。梅雨晴の强い

日のあたる家からは、信州邊では思ひ及ばぬ黴臭いにほひの吹き出る前を通つたりして行つた。夜行車での勞れを一眠りした後暗くなるまで、帆影もない日向灘をみて居た青島の半日は、殊にその時の心をしめて居た煩瑣なる世間事は今もまざまざと動いて居るやうに思はれるが、焦慮すればする程歌は出來なかつた。

　かうなるとやがては自分ながら少しくなげやりの氣持にも墮ちて行つた。當時の自分の世間事が外見甚だ多忙らしくあつたことは、かうして居る自分の怠慢を許すには甚だよい口實となつた。自分に對しても亦他人に對しても。しかし自分ではほんとうは、今でも自分の仕事のために歌が出來なかつたとは決して考へて居ない。つき當つた障碍を切

り開くに精進が足りなかつたのである。かうなるとかへつて舊作に對する執着が生じた。時折は自分の歌を思ひ出して、氣に入つた少數でも歌集にしてみたらなどと考へることもあつた。しかしそれも舊作を一日を通して整理するといふ程強くもなく、長くも續かなかつた。

今年の三月には用務の少閑をぬすんで明日香を尋ねた足を直ちに吉野に登つた。一宿して朝竹林院をみた。庭園の陰になつて居る南傾斜に西洋草花の植ゑられてあるのなどがかへつて感慨を深くした。竹林院を出て、道程の見當もつかずに、消えのこつた路上の雪に渇をうるほしながら登つた。「まことに山深く白雲峯に重り」といふ句の中を歩む心持であつた。道道岩に生えた一つ葉をむしつたりした。西行庵の跡は案

外近かつたので、すぐに塔の尾をさして下ることが出來た。下り道になると前の興奮が少し靜まつて來た。着る程のもののなかつた爲めではあつたが、フロックコートなど着込んで山中を一人歩いて居る自分の姿が、我ながら自分の希ふ境地に不調和に思はれて哀れであつた。一山の檜林の一丈二丈位になつた許りなのを二三人の男がすたすたと切り拂つて居た。一人が地味に適しないから赤松にかへるのだと答へた。こんなことも迷妄と知りつついやであつた。雪はあつたが中の千本あたりの櫻の下には青い草が生えて早春の靜かさをみせて居た。此の時も歌は出來なかつた。わけもなく「御廟年を經てしのぶは何をしのぶ草など口中に誦してその音聲で僅かに自ら慰めて居た。

逡巡顧慮自らの道を拓くに力の乏しい自分にとつては、四月急に松本を去ることになつたのは何かの所緣と思はれないでもない。併し足掛七年の間、兎に角自分の或る力を致して居た仕事が、實質的には暴力に等しい方法で目の前に崩されるのかと思ふと憤ろしくもあつた。一方獨り自ら持したくさへある心持でありながら、最も外力に動かされ易い仕事に安んじて居つて、今蔑むべき暗愚の力にさへ左右されて　る自分を思へば、自ら嘲りもし憐みもしたかつた。

家族を妻の生家に寄寓せしめて、兎も角上京した時に、平福・島木兩氏から歌集出版のことを慫慂されたのは時に於て心うれしさの限であつた。それで上富坂の昔アララギ發行所のあつた下宿に、落ちつかない日をすごしながら、作歌の努力もしたが矢張歌は出來なかつた。暑中休暇は足利に落ちついて居る家族と共にくらし、病後の幼兒夏實を伴つて妻の生家に托してある荷を解いて、アララギ中から自分の歌を書きぬくために出かけた。

九月からは少しく歌が出來るやうになつた。必ずしも自ら滿足の出來るものではないが、それでもよい。もう少し作歌に力を盡したく思ふ。兎に角これも歌集を出すことになつた一つの結果と思ふとうれしい。

○

アララギの歌を書き拔いて見ると、作後見ずに放つてある自分の歌に

ついて、かねてぼんやり恐れて居たことが現實に目の前に持ち出された。拙いのはまだ我慢が出來た。自ら恥ぢ入るやうな嫌にひねくつた歌に出つ會はすと、全く放り出したくさへなつた。それに實際當つて見ると歌の數は案外少く、時時一年も二年も歌のないことなどあつて、その時時の懈怠の跡をみせられる氣がして、幾度かこれはとても歌集にはならないと思ひ、計畫を途中で放擲せんとさへした。

しかし自ら作歌當時の心境をふりかへつてみると、拙いながらに捨てがたい親しさをもつて居るものも尠しはあつた。それで兎も角殘せさうの歌だけを帳面に書き取つておいた。九月上京後しばしば繰りかへして讀んで見、多少字句を改めたりして居た。幾度かくりかへすうちに

は追追見直す歌も出來た。又一度改めた句がかへつて原作の方に執着を感じて元に戻したりした。殊に大正六年頃からの歌は、無理なやうに思へて直した句も、かへつて作歌當時骨を折つたことなどが後から思ひ出されて、今かりそめに手を入れることの力弱さを感じた。あの二三年は出來たもののよしあしは別として、吾ながら骨は折つて居たやうに思はれる。

結局大正六年以後の作は大體を存せしめ、明治四十二年から大正五年までのは少數だけのこすことにした。卷初の數聯は四十二三年頃即左千夫先生在世中の作で、所所先生の手のあともあるのであるし、拙いながらに素直な氣がして、その少しのち頃のよりはかへつて殘したかつたの

である。年次はアララギに出たのによるから、作歌の時はそれより前になるわけだが詳しいことは自分にももう分らない。ずつと後で作つて事件の關係上前に入れたのもあるがそれは極少數で、自分の心の中だけでは既に形をなしかけて居たのである。歌の大多數はアララギに出たものであるが「珊瑚礁」及「信州」に出たもの、今度初めてのものが少數ある。

○

自分の歌が多くの人人や作品、殊に自分の先きに立つて歩んで居る人人の影響を受けて居ることは言ふまでもない。しかし自分で意識した模倣には陷ちないつもりである。その點では寧ろしばしば毛嫌にさへ

墮ちることを自ら恥ちることもある。しかし今度歌集を整理してみると大正五年前の作である

霜ふれば霜にかれゆく山の上に濃き紫のりんだうの花

より前に故篠原志都兒氏の

霜枯れて草も色づく山道に濃き紫のりんだうの花

があり、大正六年の作

くろぐろと命をよろふ舟蟲の群れあさろかも朝の光に

に對して齋藤茂吉氏の

やはらかに弱きいのちもくろぐろとよろはんとしてうつつともなし

があるのを知つた。自分の作歌の時此等の歌などの程度まで意識して

居たかについては記憶がないが、一應は自分の歌を消すつもりにして居た。しかしそのうちに又消すのに未練が出て來た。此の事を明にして假に集中に存せしめたい。此の類はまだ外にもいくつかあるかも知れない。

○

歌集のはじめをなして居る明治四十二年は、始めて上京して左千夫先生の家に寄食した年である。「睡蓮」は此の時發行所を東京に移したアララギ第二巻第一號に先生の選歌として始めて載つたのである。左千夫先生の所へ來る前には、三井甲之氏のアカネに歌を出して居た。たしか

それの三號位からであると思ふ。

僕の小學校の時―當時の高等科二年今の尋常六年―の先生に中澤愛之助先生といふ人があつた。僕等を一年間敎へた後桐生在の山中へ轉任された。僕の郷里は上州高崎から二里程榛名の山麓へ寄つた所なのである。此の中澤先生が夏の講習に東京へ出たさきからホトトギスを一册送つてくれた。何の事なしにそれを讀んだ。巻頭には蕪村句集輪講が載せられて子規の名もまだ列ねられてあつた。「村百戸菊なき門も見えぬかな」など二三句は今でも記憶して居る。しかし句よりは課題寫生文の「長さ一町の間を寫生せよ」「白銅五錢」などに一層引きつけられた。がそれはそれなりになつて、それ以上自分でホトトギスを買ふなどとは

思ひ及ばなかつた。當時の僕の周圍では子供で雜誌など買ふものはなく、中學へ行つて居る年長者がやつと一部十錢の少年世界を一年に一册買ふ位であつた。ホトトギスはその時極薄いのに十三錢といふ定價がついて居た。

それから僕はどうにか中學へ這入ることが出來たが、この頃の自分の心に一つの變化を與へたものがあつた。僕の祖父といふのは博奕に身を持ち崩した揚句、强盜の群に投じ徒刑囚として北海道の監獄で牢死したのである。此れは僕の出生以前の事なので極少年の時には何も知らなかつたが、家人が固くつぐんだ不言のうちにその輪廓が段段分つて來た。それと共に尙一家の上につづけられて居る村人の指彈は、寧ろ感じ

易い少年であつた自分の心には堪へがたきものにさへ思はれたのである。强い名譽心の翼をたたき折られたやうにも思はれ、又少年通有の罪惡に對する純潔性をも大に傷められたのである。この前後數年間の僕は道で村人に逢ふのも恐ろしく、全く土にももぐりたいといふ心持で居ることが多かつた。僕は小學校の時には級中でも作文など上手の方であつたし、前の中澤先生や次の約一年を敎へられた關根甚七先生の感化で多少文學風のものを讀んで居り、戰記物位は一寸嚙つて居たので自然文學的のものに自分の寂しさをまぎらさうとした。遊ぶときは一人で野や畑を歩きまはつて土堤で日向ぼつこをしたり、泉に早い芹を摘んだりした。此の集をふ「ゆくさと」名づける氣になつたのも此の頃の追憶が

多少與かつたかも知れぬ。中學校初年級の國語教科はかういふ自分に取つては餘りに他愛ないものであつたし、數學などで苦しむことも他人より尠かつたので、可成いろいろの事を考へる暇があつた。於茲ふと前のホトトギスのことを思ひ出し毎月それを買ふことにした。最初の號には寺田寅彥氏の短篇「嵐」があつたのを記憶して居る。當時の僕にそれが十分理解出來たとは思はないが、兎に角毎月のホトトギスを待ち兼ねてよみふけつた。遂に俳句など作つて投書してみたが、これは一つも雜誌にはのせられなかつた。そのうちにアカネの創刊をホトトギスの廣告で知つて二號位から讀み出した。子規のことは勿論ホトトギスで知つて居たのであるが、その人が歌をよんだことは此の頃知つたのであ

らう。さてアカネに歌を出してみると、殆どすべてが雜誌にのせてもらへた。それに勢を得て、長詩や短文も二三出したりした。學年試驗前の幾何學教科書など放り出しておいて夜おそくまで作歌にふけつたことは今でも覺えて居る。

その頃僕等の國語漢文の先生として赴任されたのが村上成之先生である。しばらくの間はそれが矢張アカネに歌を出されて居る蛃魚といふ人とは知らずに居た。學年始めに國語教師の更迭があつた時には、今までの國語教師を少しく馬鹿にし氣味であつた自分は、今度こそほんとによい先生が來るに違ひないといふ空想をひそかにはぐくんで居た。所が來た先生は武骨一偏のやかまし屋で、或る時は廊下に於ける御辭儀

の仕方のことで僕を吸鳴りつけた。僕も負けずに正當の理由があると抗爭したがしかし遂にそのことは學校の規則に對する僕の解釋が間違つてゐるといふことを新しく學校として訓令して來られたので僕が負けといふことになつて仕舞つた。そんなことで新しい先生に對する僕の夢想はすつかり消えうせて、しようことなしに略解など買ひ込んで自分一人でカードを作つて歌の諳記などしアカネへの投稿丈を樂として居た。先生とお互に歌のことを話し合ふやうになつたのはそれから餘程の後であつた。先生が病氣で缺勤されて居た時に、自分の考をのべて學校の生徒といふだけでなしに歌の弟子としてもらひたいことを手紙で願つた。此の時にはわざわざ奉書を買つて來てそれに書いた。すると病中の先生は自分を御宅へ呼んでいろいろ話してくれた。それからは大に學ぶ道を得たといふ貌で手に入れ難かつた竹の里歌を先生から借りて殆ど寢ずに寫したこともある。これは中學四五年級の時のことである。

中學を卒業した時、村上先生にねだつて伊藤先生の所の牛飼として貰ふこととなつた。伊藤先生からの返事を待ちかねて、陽炎の立つ麥畑の中を高崎まで樣子を聞きに出かけた。丁度午睡をして居た村上先生から「人一人のことをきめるにそんな性急にゆくものか」と叱られて又麥畑の中を歸つて行つた。

上京後伊藤先生の手で思ひがけなく更に學校をやろ機會を與へられ

た。大正二年先生急死の頃のことを考へると、よくも自分が今までかうして來たことを何物かに祈り伏したい氣持にもなる。否そのためには有りがたい二三の人々を忘れて居るのではない。ただ名前にまで及ぶことを遠慮しよう。

村上先生は今年五月、十七年の高崎生活を引き拂つて郷里名古屋にかへられた。自分が松本引拂の始末報告に上つた時、先生は御自分の決意を語られた。思ひなしか先生も淋しげにみえた。高崎中學の卒業生有志に先生の歌集出版の企があり、自分がその事務の一部を行ふことになつて居たが兎角延引勝になつて居た。

十一月の三十日に先生の令息から「チチキトク」の電報を受取つても何

最後のことには思ひ及ばなかつた。しかし十二月一日の午後名古屋の先生の寓居に走せつけた時には、先生はすでに此の世の人ではなかつた。その一週間許り前に、二十年近い間にただ一度の病中代筆の端書をいただいて居る。自分の考の至らなかつたことを悔いても及ばない。自分は今年九月には幼時の育ての親たる義伯父を失つて居る。追迫長上を失ふ年に入りかけて居るやうにも思はれるのである。

アララギ叢書第十九篇として出る筈の先生の歌集「翠微」は遂に遺稿として世に出ることになつた。同じく第二十篇たるこの「ふゆくさ」は或は數日前に出來ることになるかも知れぬ。先生在すともこれは許して下さることと思ふ。

以上言ふべからざる私事に多言を費したのであるが、自分としては玆に記しおきたく思ふので、偏に讀者の寛恕を乞ふ次第である。

大正十三年十二月二十四日上富坂の下宿にて記す

○

足利の家で「ふゆくさ」の浄書をして居た歳末に當つて、歸朝の途上なる齋藤茂吉氏の病院が全燒したことを新聞でみた。昨日同氏を燒跡に訪ねると廣大なる病院と共に、氏が多年蒐集した歌學書や滯歐中苦心された醫學書が悉く燒失されたのを知つた。周圍を黑く燒いた書册の山に燒け亞鉛のやうやく覆はれて居るのを見せて貰つて言ふべき言葉がなかつた。齋藤氏は自分の最も影響された所多い人であり、又最も厄介をかけた人である。早く氏の病院が再興され、氏の書庫が舊に倍して、氏の精細鋭利なる研究が自分等を導いてくれる日の近からむことを祈つて止まない。

○

出版については島木・平福兩氏から非常な配慮を蒙つた。平福畫伯は多忙中にもかかはらず裝幀口繪をお描き下さることになつてゐる。本

集が世に出られるのは全く島木氏の御口添へである。自分は本の體裁など餘り拘泥すべきものではないと思つて居たこともある。併し自分のものを作るとなると決してさうでない。出來るだけ立派にしたくてたまらない。それがため、古今書院主人橋本氏には隨分無理な御願ひをしたが、主人は皆それを認容して下されて、非常に立派な本として下さる筈である。只只感謝の外はない。

大正十四年一月十日追記

大正十四年二月二十五日印刷
大正十四年二月二十八日發行

ふゆくさ奥附
定價貳圓參拾錢

版權所有

著者　土屋文明

東京市外西大久保四五九
發行者　橋本福松

東京市日本橋區兜町二
印刷者　神谷岩次郎

東京印刷株式會社印行

發行所　東京市外西大久保四五九
振替東京三五三四〇番
古今書院

アララギ叢書目次

編	著者	書名	發行・定價
第一編	島木赤彦 中村憲吉 合著	馬鈴薯の花	東雲堂發行 定價壹円參拾錢
第二編	齋藤茂吉著	赤光（しやくくわう）	東雲堂發行 定價貳円參拾錢
第三編	古泉千樫著	屋上の土	未刊
第四編	島木赤彦著	切火（きりび）	品切
第五編	齋藤茂吉著	短歌私鈔	品切
第五編	齋藤茂吉著	續短歌私鈔	品切
第六編	中村憲吉著	林泉集	春陽堂發行 定價壹円八拾錢
第七編	齋藤茂吉著	童馬漫語	春陽堂發行 定價貳円五拾錢
第八編	島木赤彦著	氷魚（ひを）	岩波書店發行 定價貳円五拾錢
第九編	長塚節著	長塚節歌集	春陽堂發行 定價貳円七拾錢
第十編	齋藤茂吉著	あらたま	春陽堂發行 定價貳円四拾錢
第十一編	伊藤左千夫著	左千夫全集	春陽堂發行 定價參円五拾錢
第十二編	松倉米吉著	松倉米吉歌集	古今書院發行 定價壹円五拾錢
第十三編	土田耕平著	青杉	古今書院發行 定價壹円八拾錢
第十四編	石原純著	靉日	アルス發行 定價貳円八拾錢
第十五編	中村憲吉著	しがらみ	岩波書店發行 定價壹円八拾錢
第十六編	島木赤彦著	歌道小見	岩波書店發行 定價壹円五拾錢
第十七編	アララギ發行所編	大正十二年震災歌集 灰燼集	古今書院發行 定價壹円八拾錢
第十八編	島木赤彦著	太虚集（たいきよしふ）	古今書院發行 定價貳円貳拾錢
第十九編	村上成之著	翠微	未刊
第二十編	土屋文明著	ふゆくさ	古今書院發行 定價貳圓參拾錢